

武蔵野日曜聖書講筈

無の諸相

——マタイ伝第5章38～48節——

1993年6月6日

小池辰雄

絶対無抵抗 十字架で無 私のない世界 宇宙の精神と融合 愛なる無 宇宙心 栄西の「大
いなるかな心や」 終りなき詩 歩くところ即ちそれ道なり 卑きに付け 無的実存

【マタイ5】

38 「目には目を、歯には歯を」と云えることあるを汝ら聞けり。39 されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のため祈れ。45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

●絶対無抵抗

38 「目には目を、歯には歯を」と云えることあるを汝ら聞けり。

「目には目を、歯には歯を」というのは、

「役人が罪人を取り扱うにあたって、そのような仕返しをするのが本当だ」ということ。

「生命には生命を」

という言葉もある。殺人罪を起せば、殺してしまえというわけです。それが本当の原則だということ。これは本来は、私人としてそういう復讐をせよということではない。刑罰の方のことです。それに因んだ言葉が、出エジプト21章22節にある。



これはラテン語で

「レックス・タリオニス（復讐律）」

ドイツ語でいうと、

「レーベン ウム レーベン（生命には生命を）」

といて報いるわけです。そういう厳然たる法則があるんだということです。審判人がそれをやれという。この頃の刑法をみると、これよりかずつと軽くなっている。正直、少し軽すぎると思うことがあります。死刑はなかなかしないようにしている。ところが、本来はそうではないんだ、というのがこれです。

『目には目を、歯には歯を』と、そういうことを聞いているねえ」と。けれども、

39 されど我は汝らに告ぐ、**悪しき者に抵抗**うな。人もし汝の右の**頬**をうたば、
左をも向けよ。

キリストは今度は、裁判官でなくて一般的な意味で語っておられるわけです。

「頬をうつ」

というのはイザヤ書50章にある。

「6 われを**撻**つものにわが背をまかせ、わが**鬚**をぬくものにわが頬をまかせ、
恥と唾とをさくるために**面**をおおうことをせざりき。7 主エホバわれを助け
たまわん。この故にわれ**恥**ることなかるべし。我わが**面**を石の如くして**恥**
めらるることなきを知る。

キリストみただ。この「石」というのは「火打ち石」のことです。打った方がかえって痛いぞ、と。厳然としていれば、そういうわけです。

8 われを義とするもの近き**あり**。たれか我とあらそわんや。われら相共に
たつべし。わが仇はたれぞや、近づききたれ。

「我を義とするもの天にあり」という言葉がヨブ記16章にもある。

9 主エホバわれを助け給わん、誰かわれを罪せんや。視よ、かれらはみな衣
の**とく**とくふるび、**蠹**のために**く**いつくされん。」（イザヤ50・6～9）

まさに無抵抗です。無抵抗に徹したのが、賀川豊彦先生です。賀川さんはトルストイの絶対無抵抗に非常に感激して実践されたわけです。ということは結局、無が源泉なんです。

● 十字架で無

「無」という字は

「天蓋の下に 廿廿の林」

と書く。大空の下の四十の林の木の数は数えられるか。「無」は即ち「無数」を表わしている。「数えられない」ということ。面白い字です。まさに無即無限無量をこの無の字が表わして



いる。だから、漢字というのは素晴らしい。世界で最高の文字です。漢民族というのは凄い。無の境地を実証したのは、誰あらんや、イエス・キリスト自身なんだ。自分を何者ともしなかった。神、一切だった。だから、彼は無限無量なんだ。

「我を見し者は父を見しなり」

と言う。無者でなければ、このことは言えない。

我々はキリストから十字架で無をたまわった。十字架で無我の境地をいただいた。そうすると、即無限無量になる。無限無量は聖霊の世界です。だから、「十字架と聖霊」は絶対的に切り離すことができない。本当に十字架を受けとれば、

「我キリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、キリストわ

がうちに在りて生き給うなり」

と、パウロがはつきり言っている。

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

とはこの聖霊の世界です。何といつても、パウロはその点で一番キリストを体験、体現している。一番キリストに逆らっていた者が逆に一番キリストの証者になってしまった。宇宙的なキリストです。一般の教会なんていうのは、キリストを限定してしまっていますから。とんでもない。キリストは限定なんかできるひとではない。説明なんかできるひとではない。

³⁹されど我は汝らに告ぐ、**悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、**

左をも向けよ。

イザヤ書50章と同じようなもの。自分が本当に無抵抗に徹しなければ、それができない。賀川先生の伝記を読んで、私は本当にそのことを感じた。

全世界は全部、人種がどう違おうと、みな同じ人です。「ひと」は本当は「**霊止**」と書く。神霊が止まっているのを**霊止**という。これは大言海に書いてある。およそ、そういうところから外れてしまった。

「**神の相に即して造られた**」

というのが**霊止**なんだ。神は無相です。相が無い。神さまはどんな姿をしているか誰もわからない。わからないのが本当なんだ、**霊的実存**だから。この無相を現象したのが、無相の相の相、この相は人間なんだ。

「**人間を神の相に即して造った**」

というのは、無相に即して、無相を現わしたのが、我々**霊止**です。人間は本来、神人である。神相なんだ。それからおよそ脱落したから、楽園喪失、パラダイス・ロストなんです。パラダイス・ロストは創世記の神話だけでも、あの神話が実は我々の現実ですから仕方がない。神話をもって現実を表わしている。



●私の無い世界

日本の民主主義なんてものはまったくパラダイス・ロストなんだ。

「アンダー ゴッド（神の下に）」

ではないから。とにかく、

「敬天愛人」

の敬天がなくなつてしまつていいる。私は維新の大人物は西郷南洲だけだと思つていいる。西郷さんは本当に心の熱いひとだ、深いひとだ。本当の涙をもつたひとだ。

「敵を愛せよ」

という言葉があるけれども、実は敵も何もありません。敵という意識をもつことは既に間違いだ。無敵なんです。全部、兄弟姉妹。人間はみな神さまの大家族の一人だから。敵味方というような相対的な概念は本当はダメです。そこまで我々の意識がつきぬけなくては。地球上の全国民、全民族は兄弟姉妹である。どこへ行つても

「こんにちは」

というわけだ。そういう突き抜けの人になるためには、どうしても、この無が、無私、私の無い世界が、本当に現実になつていなければできない。いわゆる信仰なんて言う必要は何もない。信仰なんていらぬ。みな本当の現の世界です、現実なんです。神的現実です。そういう人は天国人なんだ。

「恵福なるかな、靈の貧しき者、靈の無なる者、天国はそのひとのものなり」といふ。

「靈の貧しき者」

といふは、

「何も無い、乞食的に貧しい」

そうすると、

「天国はその人のものなり」

という。キリストの山上の大告白のこの第一言が素晴らしい言葉なんです。無なる靈は神の靈、キリストの靈と直結する。だから、その世界が即ち天国なんです。

「恵福なるかな靈の無なる者、それ即ち天国なり」

と言えばいい。

「それ即ち靈界なり」

ということ。

私は詩を書いていても、靈界で書いている。昨日6月5日という日は私の三つ下の妹（愛子）の命日です。私は瞑想していた。妹は今から80年前、小学校の二年生になつたばかりで猩紅熱で仆れた。

靈界で瞑想していると、妹が現れた。



「お兄ちゃん、こんな所へ来て、どうしたの？」
「どうしたもないよ、キリストさまが導いてくれたのさ」
……………

そういう瞑想の世界が私には現実なんです。だから、死んだ人が決して死んだひとではない。死にはしない。乳飲み子や幼児が仆れても、霊界で育っている。それが本当の現実なんです。地上は仮りの現実です、私たちは宿り人、旅人です。

●宇宙の精神と融合

芸術の本当の世界も無の芸術なんです。

「無」

と言うと、何か、「ただ無い」と思うけれども、これは

「無限無量」

です。この無というのは宇宙的なんです。宇宙的な性格を持っている。大宇宙の精神と——「精神」という言葉も当たらないけれども——融合している世界。そういう世界を無という。表現はできないという、ないにかかってくる。説明はできない。そういう「無」なんだ。体験し体験するより他にない。

本当の世界はみな、一人ひとりが体験しなければダメ、そして、体現しなければダメです。そこが本当の現の世界です。「信仰」ではないんだ。信仰なんてのはよした方がいい。

「私は信じています」
ではない。

「私はそこにいます」

ということなんです。「信じている」のではない。

「私はいつも現実です、現です」

ということ。根源的な現の世界にいる。相対的な現ではない。もう、私は異言になりそうで困っている。……。私が時々、こうやって静かに黙ってしまうでしょ。その黙っている世界がやはり無の世界なんです。考えているのではない。

³⁹「されど我は汝らに告ぐ、**悪しき者に抵抗**うな。」

「悪しき者」も、ただ「悪しき者」とも思わなくなる。相手を

「ああ、かわいいそうな人だ」

と哀れむ。憐れみの心がわいてくる。人間的には一応、

「この野郎！」

なんて思うかも知れませんが、その次には

「気の毒だなあ」

ということになる。

40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。
 「下着を取れば、上着もやれ」という。

ドロボーが良寛の所へやつて来た。何か盗ろうとしたら、
 「さあ、私の布団も持っていけ」というようなわけだ。良寛さんがまさに、

「下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ」

を實踐したひとだ。『レ・ミゼラブル』のミリアムという神父さんも、ジャンバルジャンが盗みに来たら、銀の酒杯をとらせた。

「いや、あれは盗られたのではなく、私がやったんですよ」

という、あの境地です。それが本当の無一物無尽蔵の世界です。アツシジのフランスがやはりそんな境地のひとつでした。こちらの一遍上人だとか、一休もそういう境地でした。

●愛なる無

41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。

キリストのこういう言のことは、要するに、

「無であれ。無者であれ」

ということですよ。無者の自ずからなる行為は愛なんです。はかられたる愛ではなくて、自ずからなる行為、相は愛なんです。無というのは口を与えている姿です。

42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

こうやってキリストが幾つもの仰るけれども、それを一つ一つ覚えて、そういうようにしようとしたら、キリストの言が律法になってしまう。そういうことではない。

「それらの言の奥は何か」

と、それを見ていかなないとね。それが私無き世界、愛なる無の世界です。キリストの一切の言も行為も全部、本当は愛ですから。それは愛のいろいろな相にすぎない。彼は怒っても、それは怒りにおける愛のすがたです。だから、愛は最大の力です。

お互いの国の境なんてものはしょうがない。国境はあれども無きがごときものだ。全部、霊止たることにおいて同じなんだ。あるべき姿は霊止なんです。この霊止からみなズレてしまった。一生懸命でひとを探しても、なかなかこの霊止はいない。

私は悟って無になったのではない。

「キリストから無をいただいた。そうしたら、無限無量の聖霊がやってきた」

と。もうそれだけなんだ。簡単なんだ。

無はいろいろな相を現わすから、今日の題に、『無の諸相』と書いた。

「下衣を取る者に上衣をも取らせよ。一里を過ぎたら二里をゆけ。請う者にあ



たえ、借らんとする者を拒むな」
 と。これはみな無の諸相、いろいろな相です。別な言葉でいうと、愛のいろいろな現れ方
 と言つてもいい。福音書を読めば、キリストの言葉も行為も全部、愛のいろいろなすがた、
 いろいろな表現なんです。

「何々しろ」

とか書いてあつても、これは命令ではない。

「私に来てごらん、みんなそれはできるよ」

ということ。キリストの言葉を律法にしてはダメです。福音とは、言葉の奥のキリストそ
 のものを受けとれば、行為であろうと言葉であろうと、全部それが身についてくる。もち
 ろん、我々は、すべてが朝から晩までそうだとはいけませんよ。躓いたり転んだりの人間
 ですけれども、しかし、その主流をなすものはそうなってくる。

こうやって私は読んでみると、面倒くさくなってくる。いろいろなことを仰っているけ
 れども、

「結局、無ですよ。あなたの無の相がいろいろに顕れている。それをいろいろ仰つ

ていますね」

と言いたくなる。

●宇宙心

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等

きけり。

これは実は、旧約聖書にはこのままの言葉はない。何か伝承にそういう言葉があつたか
 も知れませんが。

44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。

普通は「仇」と考えられる者は、実は兄弟だ。相対的判断を乗り越えてしまう。「責むる者」
 もみな兄弟だ、何でもいいよ、と。そのために祈る。「責むる者」とか「仇」とか、そういうはっ
 きりした概念でやると、かえって苦しくなる。

「みんな可哀そうなやつだ」

と言つて、祈つてやる。

国の間も善隣です。それぞれの民族、国家には使命がある。ひとの使命をいい加減にしたら、
 とんでもないはなした。

45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。

まさにそうです。霊界の、神さまの子とならんために。本当は「子とならん為に」ではない。

「天界の、霊界の、神さまの子であるならば、必ずこういうことはできるよ」
 ということ。逆になる。



「こうすれば、子となる」

ではない。先ず、神の子であることが先ですから。

天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。

これは私は好きな言葉だ。区別はしない。一視同仁である。相対的な区別をして何になるか。これは本当の宇宙心だね、宇宙的な心です。

●栄西の「大いなるかな心や」

道元の先駆者に栄西という禅宗の坊さんがいる。これはなかなかエライやつだ。1141年から1215年、平安末期の人だ。この人が「こころ」のことを言っている。

「大いなるかな心や。」

天の高き極むべからず、

而るに心は天の上に出づ。

地の厚き測るべからず、

而るに心は地の下に出づ。

日月の光は躡ゆべからず、

而るに心は日月光明の表に出づ。

大千沙界は窮むべからず、

而るに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚かそれ元気が。

心は即ち太虚を包んで、

「太虚」とは大空のこと。

元気を孕むものなり。

天地我を待つて覆戴し、

日月我を待つて運行し、

四時我を待つて変化し、

万物我を待つて発生す。

「四時」とは春夏秋冬のこと。

大いなるかな心や。

この「心」というのは宇宙心だね。

吾已むことを得ずして、

強いて之に名づく。

是を最上乘と名づけ、

また第一義と名づけ、



またはんにやじつそつ
亦般若実相と名づけ、
また一眞法界と名づけ、
亦楞嚴三昧と名づけ、
亦正法眼蔵と名づけ、
亦涅槃妙心と名づく。……
教外別伝と号す。……」

これが本当の心の世界だと言う。宇宙心だね。栄西は道元の先輩です。凄いやつだ。栄西がお茶の元祖です。

● 終りなき詩

46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、
取税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、
異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、
汝らも全かれ。

この最後の言葉の、

「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」

という、これ以上のキリストの我々に対する言はない。

「神さまのように全かれ」と言う。

「いったい、「全き」とは何ですか。私は「完全」という言葉はあまり好きではない。ドイツ語で「フォルコメンハイト」と言いますが、でも、「フォルコメン」とは、まったく満つるようにそこに到達することです。そうすると今度は本当は、その先がなくなる。完全とすることが達せられると、その先がなくなる。だから、私はあまり好きではない。私は無限が好きなんだ。限りが無い、無限無量、量れない。その先、どこまでも行き着くところを知らない、量れないということ。「全き」というものは、それでお終いなんです。それを「フォルエンデン（全うする）」と言う。全うすると、それで安心してしまってお終いだ、先へ進まない。私の詩も終りなき詩でありたいと思っています。

「これでお終い」

なんてのではない。無限です。

「天の父の全きが如く、汝らも全かれ」

というキリストの言には、反対するということもおかしいけれども、これは凄い言葉だ。ということとは、

「素晴らしい全き天の父に全部自分を投げ入れろ」

ということですよ。投げ入れなければ、その完全性が入ってこない。完全性だけでたくさんだ、完全になつたら大変だ。



満つる三日月は、上弦の月は、三日月でありながら、これは満月になることを約束されている。この三日月は完全性なんだ。そういう

「三日月であれ」

ということですよ。それなら、まだいいよ。

「満月になれ」

と言ったらダメなんです。満月になったら、今度は逆に欠けていく。私は、

「これでいいということはないという世界が本当の世界だ」

と思っっている。私は、「天国」だっと思って思っっている。限りない世界だと思っっている。

「円現」という言葉は好きだけれども、本当の姿はいろいろのすがたに変ずることができる。そういうものはいったい何ですか。水です。水はコップの中に入れば、円筒形になる。流れているときには、水にはすがたがない。何かにぶつかれば、滝になったりする。水は変幻自在です。

「水の如くあれ」

ということ。空気もそうだ。見えない。見えないけれども、世界に充滿している。空気は我々を囲んでいる。

「お前はそんなところで出っ張るな」

なんて言っつてやしない。包んでいる。空気も素晴らしい。空気と水。無相であつていろいろな限りなき相を持つている。そういうのが自在な世界です。

● 歩くところ即ちそれ道なり

老子の自由な世界がそうです。自由無礙むげなんです。

「道の道とすべきは常道に非ず」

という。本当の道は「これが道である」なんて言っつたらもうダメだ。無道の道だという。

無道の道をつくつていっているのは何ですか。空ゆく鳥です。鳥は無道の道です。自動車や電車を走らせている人間なんてのは本当は情けない。むしろ、人間は歩いているのが一番いい。どこでも自由に歩いているのが。歩くところ即ちそれ道なり、と。

キリストの

「我は道なり」

も、そうなんです。「どんな道ですか」なんて、限定はできない。それが本当の、私無きところの、無の自由の世界です。

本当の無の自由は天的必然なんです。天的な必然の世界。

「他にはありようがない。その時はそのようになる、そのようにいく」

というのが天的必然という。それが本当の自由です。人間が考えている自由なんてものはひとつも自由ではない。自分に縛られている。



川はどの川もみな海に流れていく。いろいろなものが混ざっている。海はそれを全部引き受けてしまう。塩でもつて全部これを浄化してしまう。素晴らしいね、海というものは。だから、魚は生きていく。あれは汚いままだったら、魚は死んでしまう。何でもござれと、全部、塩で浄化して、今度はそこからきれいな水蒸気になって上っていく。

不思議なものだ。大自然の法則というものは素晴らしいものだ。それを人間がいろいろなことをして歪めてしまう。人為はダメです。人間の、つくられた考えだの技だのはダメ。だから、我々の本当の生き方は宇宙の法則、自然の法則に即することが本当の自然であり、本当の自由である。

神さまと大自然とを融合したような境地を把んでいたのが、ドイツの大詩人ゲーテです。神さまというものをもし限定したらダメなんです。

「神はかくかくのものである」

なんて言ったらダメです。エックハルトが

「説明のつくような神は神ではない」

と言っている。こういうことを語っていると、私は楽しくてしょうがない。

●卑きに付け

ロマ書11章にこういう言がある。やはりパウロさんだね。パウロの一番素晴らしい書翰だ。

「³³ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋

ね難し。³⁴『たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。³⁵たれか先ず

主に与えて其の報を受けんや』³⁶これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、

神に帰すればなり、栄光とこしえに神にあれ、アアメン。」(ロマ11・33～36)

「測り難い」という言葉がある。人間が憶測なんかできるかということ。やはりパウロと
いうのは凄いひとだよ。手紙の中で感嘆している。説明しているのではない、告白してい
る。悠久無限、無量であり永遠である、無窮である。窮まり無い。そういう世界が我々の
本当の世界である。そういうところに呼吸しているかな？ 同じ鼻から空気を吸っていて
も、違うんだよ、吸い方が。

「又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知

らんために心を更えて新たにせよ。」(ロマ12・2)

いや、これは逆なんだ。

「神の御意の善にして悦ぶべきところに自分を入れていけば、心は変わるぞ」

という。

「心を変えて新たにしてから、やる」

のではない。

「そうすると、心は変わってしまうぞ」



ということ。どうも言い方がうまくないね。パウロさんが

「そうだ、その通りだ」

と言ってるよ。ロマ書12章にはキリスト者の本当の実存が書いてある。

「¹⁵喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。¹⁶相互に心を同じうし、高ぶりたる思をなさず、反って卑ひくきに附つけ。なんじらごをさ聴きしとす為な。」(ロマ 12・15～16)

非常に懇ろに書いてあるね。ギリシヤ語ではこの「全き」というのは「テレイオス」という字で、「テロス(目的)」という字と同じです。

「然らば汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ」

という、このキリストの言葉は凄い言葉だ。これ以上の言葉はない。「天の父の全きが如く全かれ」なんて、手離しで誰もこんなことはできやしない。

「私は何ものでもない」

と言ったキリストが神さまを完全に受けとつたでしょ。そうしたら、神さまの天の父の完全性を彼が現じていた。だから、

「私のように神さまを受けとれ」

ということですよ。我々はキリストを受けとればいい。キリストを本当に受けとれば、その完全性が展開していく。どこまでも、私は「完全」とは言いませんよ、完全性です。それは、私の言おうとしているのは、無限無量性ということですよ。むしろ「完全」よりも、

「無限無量性を受けとれ」

ということが本当の生命の世界です。完了している世界ではない。限りなく展開していく。

「インマー ヴェルデンデス ザイン」(常に成りつつあるところの存在)

です。ゲエテがやはりそうなんです。

「ゲヴォルデン(成ってしまったもの)」

はダメだと。常に成りつつあるところの存在がいい。

「成りつつある」

とは、本質的なものを受けとっているから、本当の「成りつつある」なんです。本質的なものを受けとらないで、「成りつつある」なんて言ってもダメです。それは人間的な努力になる。根源的なものを受けとると、これが「成りつつある」という楽しい展開になってくる。神・キリストを受けとると、「成りつつある」ところのキリスト者です。自分で努力して「成りつつある」なんて、そんなのはくたびれてしまつてダメだ。

「成さしめられつつある」

と言った方がいいかも知れない。力が来ているから。力を受けとらないで、「成りつつある」なんて言えっこない。上から力が来ている、生命が来ている、光が来ている、愛が来ている。

「私は天の父の完全性をいただいている。私を受けとれ、そうしたら、私の言つて



「いるこの言葉が本当に現実となるぞ」ということです。完全性、無限性ということ。「性」の字を忘れないように。私は言葉としては、完全性よりも無限性の方が好きだ。無限無量性の人であります。キリストそのものが無限無量だからね。

●無の実存

いわゆる神学なんてのはダメなんです、限定しているから。限定しているような神学はダメ。私は『無の神学』（小池辰雄著作集第3巻）を自分で読んでみたら、やはりちゃんと書いているなと思った。それはいわゆる概念の世界ではないから。普通の神学とは違う。大体、みんな私のことを相手にしない。いいんだよ、相手にされなくて。キリストが「よし」と言ってくだされば、それでたくさんだ。

私は『曠野の愛』誌第33号（内村鑑三先生百三十周年記念1960年春季号）に「無の実存」という文章を書いたことがある。よく書いたと自分でも感心している。巻頭の文章（「己を空うして十字架の死に至るまで」）に内村先生の言葉を引用してある。

「たずぬるに師なく、はかるに先輩なく、かたるに友なく、唯一人机によって内村全集をひもとく。天の書翰の如く先生の言々句々が私の腸はらわたに沁み入る。眼底に涙湧き、感謝と感激に血はおどり、希望と讚美に胸は高鳴り、信愛にたましひは天かける。

空谷くうこくに磔音あしおとを聞いてよろこぶ人にも似ている。この空谷に聞こえた先生の深い一言をここにしるせば、「伝道は教を説くことにあらず、愛を以て、自己を与つることなり、自己をむなしうすることなくして、山をなすの教義、川をなすの言語も、以て人一人を救うに足らず、貧困、疲労、挫折、これ人生を救うの力なり、世は雄弁を以て救う能わず、また議論を以て化する能わず、ただそのために自己の生命を棄ててのみ、これを神に導くを得るなり。」（ピリピ2:5～8）

「己を空しうし僕の貌かたちをとり……十字架の死に至るまで順い給えり」かかる無の実存のイエス、聖意体现のイエスをパウロが喝破した。そこに「伝道の真義」ありと内村先生は道破した。「愛は律法（義）の完全なり」（ロマ13・10）愛は十字架の荷にまいであるからである。一切を荷うことである。敵を荷うことである。そうでなければ神の義が成就しないのが罪の世の現実なのである。それは神の義には愛の血がかよっているからである。「愛は不義を喜ばずして真理の喜ぶところを喜び、凡そ事包み、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐え」ぬくのである。

いかなる非難も、拒否も、白眼も、誤解も、冷酷も、黙殺も、キリストの愛で受けとめよう。

「宿かさぬ人の心をなさけにておぼろ月夜の花の下臥し」

